

シタグリプチンを服用した患者さんにおこなったアンケートの結果と考察

碓氷・安中支部 つばさ薬局 高橋 博子

〔背景〕 2009年12月以降に発売されたDPP-4阻害薬やGLP-1アナログ製剤は、新しい糖尿病治療として注目されている。講演会が開催され、現在もさらなる臨床データが公表されているところである。

保険薬局でも、DPP-4阻害薬が処方された糖尿病患者さんの来局が増加しており、血糖やHbA1cなどの数値を患者さんからお聞きする機会も増えているのではないかとと思われる。

今回、DPP-4阻害薬を服用した患者さんへのアンケートを実施した。糖尿病は、慢性の疾患であり、患者さん自身が主体的に取り組んでセルフケア行動を獲得し、維持できるようになる過程を援助することも大切である。

今後の患者さんへの対応の参考になればと考え、そのアンケート結果とHbA1cの変化について紹介させていただくことにした。

〔内容〕 当薬局は糖尿病患者さんが多く来局しており、DPP-4阻害薬を服用された患者さんも多く、服用された患者さんを対象にアンケートを実施した。対象患者さんは、2009年12月～2011年1月までにDPP-4阻害薬のひとつであるシタグリプチン(当薬局では商品名グラクティブ)の服用期間が、3ヶ月以上であることを基準とし、アンケート実施期間は、2011年1月の1ヵ月間。アンケートの内容については、スライドにて紹介させていただく。

また、長期でDPP-4阻害薬を服用された患者さんのHbA1cの変化についても調査・集計をおこなった。

〔結果・考察〕 アンケートに協力してくださった患者さんは、90名。アンケートの結果、食直前服用の必要がある α -GIやグリニド系の薬剤を服用されていた患者さんにとっては、服薬コンプライアンスはより向上し、服用回数が減ったことがかなり精神的に負担減に感じられたようである。

また、目にみえる血糖値やHbA1cの変動は、患者さんのアドヒアランスの向上(変化)に影響を与えられられる。

長期でDPP-4阻害薬を服用された患者さんのHbA1cの変化は、服用開始後12週で平均して約0.55%の低下がみられたが、12週以降は、約0.04%の低下にとどまっていた。原因として、HbA1cの数値改善による油断、季節性イベントの問題が考えられた。

患者さんごとに病態や理解度および生活環境は異なっているため、薬物療法をより効果的かつ有用なものにするためには、個々の患者さんに合わせた服薬指導が必要であると日々感じている。限られた時間のなかでは、一方通行の指導になってしまいやすい。しかし、回を重ねながら、患者さんと向き合って話をして信頼関係を築いていくことが、患者さんに合わせた服薬指導につながるのではないかと考える。